# 中学校における「生徒の自己決定」
# 実践事例集

令和３年３月

# はじめに

目まぐるしく変化していく社会の中で、多くの情報に取り巻かれながらも自分の意思で様々なことを判断、決断していく力は、生徒の今後の人生において必要とされている力であり、学校教育においても生徒に身につけさせなければならない資質･能力である。生徒自身の意思で判断、決断していく力の育成の一環として、生徒の主体性･意欲向上を目指した活動は学校教育に求められるものであり、学校教育の様々な場面において実践されなければならない。

生徒の主体性･意欲向上を目指すための方策として、生徒指導の3機能の「自己存在感を与えること」、「共感的な人間関係を育むこと」、「自己決定の場を与えること」が生徒指導提要（文部科学省2010）に挙げられている。とりわけその1つである「生徒の自己決定」がもたらす影響として、「児童･生徒が、ダイナミックな日常生活のそれぞれの場面で、どのような選択が適切であるか、自分で判断して実行し、また、それらについて責任をとるという経験を広く持つことの積み重ねを通じて、自己指導の力は育てられる」（坂本1991）、「様々な場や機会を利用して、児童生徒に自己決定を求めていくような指導を行うことが、自発性や自主性、自律性や主体性をはぐくむ」（文部科学省2010）ということからも、生徒の主体性･意欲向上に影響を与えるとされている。

以上のことを踏まえ、今回機会をいただいた岡山県政策課題研究派遣の一環として、生徒の主体性･意欲向上のために、「生徒の自己決定」をテーマとした教職実践研究を進めてきた。「生徒の自己決定」をテーマとした教育実践のねらい、内容、留意点や実践による生徒の変容を整理し、事例集として綴ったものが本資料である。本資料を作成することで、学校全体で「生徒の自己決定」に関する実践を推進するとともに、生徒の主体性･意欲向上により効果的な「生徒の自己決定」について模索する際の参考にしていきたいと考えている。

また、本資料をご一読いただいている皆様方には、本資料の事例における「生徒の自己決定」に関する実践の、効果的な場面、形式、教師の働きかけ、工夫点や留意点、生徒の変容等を基に、生徒の主体性･意欲向上を目指した実践にご活用いただきたい。

最後に、本資料の作成にあたって、ご指導いただいた香川大学教職大学院指導教員の先生方、実践を進め、事例をご提供頂いた岡山県津山市立津山西中学校の皆様方に深く感謝申し上げます。

令和３年３月

岡山県津山市立津山西中学校　教諭　　福元 亮彦
（香川大学教職大学院　学校力開発コース）

目　次

**Ⅰ．学習場面における実践**

１．授業づくりに関する実践

（１）生徒主体の授業を目指した「ミニティーチャー」実践（２年生数学科）・・・・・・・・・１

（２）生徒による説明を重視した実践（３年生理科）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２

（３）生徒が教員役を担う授業実践（特別支援学級３年生英語科）・・・・・・・・・・・・・・・・・３

２．課題学習に関する実践

（１）自主学習ノートと振り返りシートによる実践（２年生社会科）・・・・・・・・・・・・・・・５

３．テストに関する実践

（１）選択式小テストの実践（２年生理科）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７

**Ⅱ．特別活動における実践**

１．学級活動

（１）班長会を核とした学級経営（１年生）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８

２．生徒会活動

（１）学級代表委員会による学級課題の解決（１年生）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９

（２）学級代表委員会による目標設定および目標達成の実践（２年生）・・・・・・・・・・１０

（３）学級代表委員会による学級の理想像の実現（３年生）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２

（４）生徒会による啓発動画作成（生徒会）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４

３．学校行事

（１）３年生運動会実行委員会による学年種目の企画･運営（３年生）・・・・・・・・・・・・１５

（２）教員企画による生徒参加型行事（教員のOJTグループ活動による実践）・・・・・１６

**Ⅲ．部活動における実践**

（１）生徒のボトムアップによる部活動運営を目指した取組（女子テニス部）・・・・１８

## Ⅰ．１．（１）生徒主体の授業を目指した「ミニティーチャー」の実践

**１ 実践の場面**

教科学習（２年生数学科における実践）

**２ 実践のねらい**

学習時間の余裕を生み出し、様々な学習状況に対応できるようにする。

**３ 実践の内容**

数学の授業において、教員からの説明を必要最低限にし、生徒同士が教え合い･学び合いの学習により、生徒が自ら学ぶような主体的な授業づくりを実践した。

生徒が授業内で達成すべき課題や問題を設定し、それを授業内で学級全員が達成できるような教え合いや学び合いをねらいとする。授業の序盤は、学習内容を教員が短時間で説明し、その説明や参考書を基に生徒が自力解決する時間を設ける。本時の課題が解けた生徒は一人ずつ教員へ見せ、合格を目指す。合格した生徒はその後に、ミニティーチャーとして他の生徒の学習支援を行う。どの生徒に教えてもらっても良いし、どの生徒に教えても良い。教え方も生徒に任せているが、生徒同士で教え合いや学び合いを行うルールとして、答えを教えるのではなく、考え方や道筋等を教えるのみとした。授業での教員主導の場面を必要最低限としているが、課題の内容や生徒の学習状況によって、必要なポイントを押さえる。

**４ 実践の留意点･工夫点**

**① 生徒の活動**

教員の説明する時間を必要最低限にすることや、授業の進度スピード等を工夫し、１時間の授業の中や年間計画の中で生徒主体となる時間を生み出すようにしている。また、基本的には板書を写す等のノートを取ることはさせていない。

**② 教員の関わり**

教員は、その時間の学習内容の解説を短時間で行い、本時の課題の添削を行う程度にとどめている。また、課題が出来た生徒を全体に知らせることも教員の役割である。

**③ 実践の過程**

まずは、学力上位層が中心に教え合いを始めることをねらい、徐々にミニティーチャーの人数を増やすようにしている。

**④ 活動の振り返りや評価**

授業中の課題を達成した生徒を教員から教室全体に知らせることで、その生徒自身のモチベーション向上や「教わることができる人」として他の生徒へ周知させる。

**⑤ 実践の準備**

見たらわかるように学習内容が整理され、「こればできればOK」となるような問題が取り上げられている参考書をベースに授業を進めた。そういった副教材の準備が必要になる。

**５ 実践における教員の気づき（生徒の声や反応）**

この授業形態により、授業終了後の休み時間にも継続してノルマの課題を達成しようと教え合いを続けている姿が見られ、生徒の学習に対する意欲が見られた。また、生徒から教え合い･学び合いが楽しい等の声が聞こえている。今後は、授業中や年間の授業を通して、時間的余裕をもっと生み出すことで、応用的な内容や課題にも時間を割き、全体的な生徒の底上げをしたい。

## Ⅰ．１．（２）生徒による説明を重視した実践

**１ 実践の場面**

教科学習（３年生理科における実践）

**２ 実践のねらい**

学習に対する興味･関心を生徒に持ってもらい、学びに対する姿勢の伸長を図る。

**３ 実践の内容**

授業において、現象や実験結果等についての理由を、生徒が生徒自身の言葉で周囲に説明することを意識的に取り入れている。１年時の授業から継続的に取り組んでいるが、最初は穴埋め等の与えられた形式に沿った説明から慣れるようにした。学年が上がるにつれ、説明する機会を重ねることで、生徒独自の言葉で説明するようになった。現在の３年生では、生徒自身が考えた方法により説明するようになっている。

**４ 実践の留意点･工夫点**

**① 生徒の活動**

生徒が学習内容を説明する取組では、挙手制により生徒を指名しているが、説明する機会を経験させるためにも、機械的(席順等)に指名し説明することに慣れさせるようにしている。初めは穴埋めによる説明方法に慣れるようにし、生徒にとって習慣化するまでは取り組みやすい形式の準備が必要である。

**② 教員の関わり**

生徒が説明に詰まる時などは、生徒の言葉を引き出すように、授業者からの上手な問いかけが必要となる。

**③ 実践の過程**

１年時から意識的に｢説明の機会｣を取り入れているが、習慣化させるためには時間をかけて継続していかなければならない。

**④ 活動の振り返りや評価**

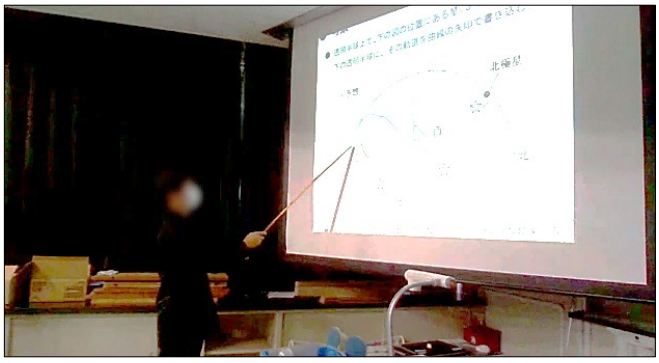
生徒の説明場面の後には、必ず教員からのコメントやアドバイス等により生徒に対するフィードバックを行っている。

**⑤ 実践の準備**

日頃から頻繁に生徒の言葉による説明機会を設けることが大切で、事前の準備物等は特にない。

**５ 実践における教員の気づき（生徒の声や反応）**

テストにおいての記述回答が以前は無回答が多かったが、生徒の言葉で説明する経験を重ねることで、自分の言葉での記述が増えている実感がある。生徒が自らの力で解決、進めようとする姿勢が見えたのも、正しい答えを出さなくても良いという実験特有の受容的な授業環境があったかではないかと考える。



## Ⅰ．１．（３）生徒が教員役を担う授業実践

**１ 実践の場面**

教科学習（特別支援学級３年生英語科における実践）　知的障害特別支援学級３年生（４名）

**２ 実践のねらい**

自分の気持ちを伝える場面を経験することにより、人前で説明する力を身につける。

**３ 実践の内容**

知的障害特別支援学級での英語の授業の一環として、生徒自身が既習事項（単元）から、興味・関心がある単元や内容を選び、生徒が教員役を担い、英語の授業を行う。自分の思いや伝えたいことを表現することの難しさに気づき、人前で授業を行うことに挑戦する。

**４ 実践の留意点・工夫点**

**① 生徒の活動**

生徒が自ら学習内容を選択することで、生徒が自信を持って授業が行えるようにした。授業内容を決める際には、既習事項のプリントを振り返りながら生徒が自ら決める。

**② 教員の関わり**

教員役として授業を行うねらいとして、入試に繋がることや人前でしゃべることの重要性について教員から生徒に説明を行った。授業内容を決定する際には、教員は既習事項や単元内容の提示だけにとどめた。

**③ 実践の過程**

形も何もないところから生徒が授業を作ることは非常に難しいが、日頃の授業で「目標、基本文、作り方、訳し方」等の授業形式を生徒に習慣化させることが必要である。生徒が教員役を担って授業を行う際には、生徒が自ら普段の授業形式に当てはめていたので、生徒に任せて自ら判断させるためにも日頃の積み重ねが大切だと考える。

**④ 活動の振り返りや評価**

生徒が振り返りをする時間を設け、生徒同士の感想を共有出来るようにした。

**⑤ 実践の準備**

生徒が参考に出来るように「既習事項の一覧」の例示**【資料Ⅰ．１．（３）－１】**と生徒が記入しやすいような授業計画シート**【資料Ⅰ．１．（３）－２】**を準備した。

**５ 実践における教員の気づき（生徒の声や反応）**

今回の取組においては、生徒にとっての良い経験となった他、生徒に授業を任せ、その授業の様子から、生徒が普段の授業で何を理解できていないのかが教員にとっての発見に繋がった。生徒が教員役として授業を行った後は、「次回はこの単元の授業をやりたい」等の意欲を感じられる生徒と、トラウマになり苦手意識を持つ生徒の両方が見られた。授業内では、教員役の生徒が困惑するような質問を控えるなど生徒同士の気遣いも見られ、生徒の社会性の一面もうかがうことができた。特別支援学級では、生徒の特性などもあるので、生徒に任せても良いことと任せられないことがあり、学級全体や集団で自己決定をさせることは難しく、どうしても一人一人の個に応じた形になりかねない。

**資料Ⅰ．１．(３)－１　既習事項の一覧**

3 年生の皆さん

授業の一環として皆さんに small teacher 授業をやっていただこうと思います。
授業内容は今までやってきた単元で一番自分が理解していると思われる単元です。
以下、参考にして自分はこれならみんなに教えてあげられると思うものを選んでみてください。今後の予定、準備は授業でやっていきましょう。

be 動詞と一般動詞の使い方
一般動詞の疑問文・否定文
一般動詞の過去形
命令文って何？どう作るの？「しなさい」「してはいけない」
疑問詞をつかった疑問文
未来を表す will と　be going to
現在進行形と過去進行形
助動詞 can may must should の使い方
There is ～、There are～
比較級
最上級
不定詞と動名詞
接続詞

キチンと理解していないと出来ないものばかりです。でも、これは出来るってものを見つけていきましょう。今後、前に出てプレゼンできるようになる訓練にもなります。面接に向けての度胸もつきます。積極的に頑張ってみましょう。

**Ⅰ．１．(３)－２　授業計画シート**

| | |
|---|---|
| 目標: | 基本文:<br>作り方 :<br>訳し方 : |
| 練習問題<br>①<br>②<br>③ | まとめ<br><br>質問はありますか？ |

## Ⅰ．２．（１）自主学習ノートと振り返りシートによる実践

**１ 実践の場面**

教科学習（２年生社会科における実践）

**２ 実践のねらい**

生徒自身が自分の興味･関心に基づく学習に取り組めるようにする。

**３ 実践の内容**

社会の週末課題として、自主学習ノートを課し、学習内容は生徒が自由に自分で選択することで生徒が主体的に取り組む課題とした。また、単元毎に振り返りシートを準備し、授業での学びを生徒自身の言葉で振り返り学習内容の定着を図った。

自主学習ノートでは、テスト前であればテスト範囲の内容、その週に授業で学習した内容、好きな単元内容等をノートに記入している。現状として、生徒の中には１ページ以上を提出している生徒も多くいる。自主学習ノートについては、内容が整理されているものを学年の廊下に掲示することで、他の生徒とも共有することができ、ノートの記述形式の例示、見本とすることとした。また、掲示された生徒にとっては自己肯定感の向上をねらいとした。

振り返りシートでは、単元を貫く課題を教員が設定し、それを踏まえて毎時間の取組を本時の目標に沿う形で、生徒自身が自分の言葉で記入するものである。単元の終わりに、これまでの振り返りを基に初めに提示した課題に答える取組を行った。

**４ 実践の留意点･工夫点**

**① 生徒の活動**

生徒の中には、何をやったら良いのかわからない生徒もいるので、教科書の丸写しでもOKにする等、自主学習内容の許容範囲を広げた。

**② 教員の関わり**

取組の初めに、自主学習ノートで何をすれば良いか等の模範例を示し、助言するだけにとどめた。

**③ 実践の過程**

生徒が自主学習ノートに取りかかりやすくするためにも、ノートの記述形式例を提示することから始めた。

**④ 活動の振り返りや評価**

一部生徒の自主学習ノートを廊下や文化祭等にて掲示することで、生徒の意欲向上と記述の工夫を生徒間で共有できるようにした。

**⑤ 実践の準備**

自主学習ノートの記入例と振り返りシート**【資料Ⅰ．２．（１）】**を準備した。

**５ 実践における教員の気づき（生徒の声や反応）**

生徒が自ら興味ある内容を自主学習に選択することで、未学習の学習内容まで自主学習ノートに記述する生徒も見られた。その自主学習が予習となり、自主学習した内容が授業において扱われると意欲的な学習姿勢になる姿が見えた。

しかし、試験で点数を取ることを重視する場合、プリント学習の方が効果的かもしれない。今後の実践としては、生徒が主体的に取り組むプリント学習へ発展させていきたい。例えば、単元別プリントボックスを設置し、生徒が自分に必要な単元を選び取り組む等していきたい。また、自主学習ノートとプリント学習のどちらかを選ぶ形式も良いと考えている。

資料Ⅰ．２．（１）　振り返りシート

第２編第３章１節　九州地方−環境問題・環境保全に向き合う人々の暮らし

２年（　　）組（　　）番　氏名（　　）

**単元の課題**　**九州地方では、これまでにどのような問題があったか、その後は何を目指してがんばっているのかを図を使って述べることができる。**

※各時間の振り返りや考えの変化を記入する。

| タイトル | 1 | 2 | 3 |
|---|---|---|---|
| 振り返り（タイトルとリンクするように） | | | |
| タイトル | 4 | 5 | 6 |
| 振り返り（タイトルとリンクするように） | | | |

九州の説明をするのに使う図を三つ選んで貼り付けよう！！

一つ目の図 → 二つ目の図 → 三つ目の図

【図を使いながら、これまでの九州地方の課題とその後の展開について述べる。】

評価の目安
・図を使って説明している＝B
・図の関係性に注目し、図を効果的に使い説明している＝A

## Ⅰ．３．（１）選択式小テストの実践

**１ 実践の場面**

教科学習（２年生理科における実践）

**２ 実践のねらい**

生徒がより効果的に学習に取り組めるようにする。

**３ 実践の内容**

学習内容を振り返る小テストの種類を生徒が選ぶ実践である。自分の学習状況に応じてテストの難易度を選ぶような習熟度小テストを実施している。

出題範囲となる単元別プリント（今までは提出課題にしていたもの）を生徒に配布し、そのプリントから出題される問題が指定された「基本的内容のテスト」と、同様のプリントから出題されるが出題範囲が広い「発展的内容のテスト」を準備した。生徒が自分に合ったレベルを目標に頑張り、意欲関心を持って主体的に学習に取り組むことをねらいとしている。基本的には生徒が自分の判断でテストを選択しているが、基本よりも発展を目指すように生徒へ投げかけている。今までは、提出物として単元別プリントを生徒に課していたが、生徒にとってはやらされている印象を抱きがちで、この小テストにより力がつくこと、後々の定期テストの学習に繋がることを生徒に意識づけるねらいがある。

**４ 実践の留意点･工夫点**

**① 生徒の活動**

この取組を行うにあたって、課題等の提出物をなくした。答えを転写するだけの提出物は無意味と考え、選択式の小テストにより、生徒にとって意味ある学習の実現をねらっている。また、基本問題よりも発展問題の方が成績に優遇されることを生徒の伝えることで、中間層にも発展問題を解くよう促している。

**② 教員の関わり**

生徒が小テストの問題を選択する際には、生徒によっては、実態にそぐわない問題を選択することもあるため、実態にあった方を選ぶように教員から助言する。また、判断に迷っている生徒に対しても助言をしている。

**③ 実践の過程**

事前に準備テスト（模擬小テスト）を行い、生徒に自身の現在の力をつかませるようにした。

**④ 活動の振り返りや評価**

小テストの成績は評価の関心･意欲の観点に加算し、今後の評価観点の変化に対応しようと考えている。

**⑤ 実践の準備**

単元別テストから出題が指定された基本的内容のテストと出題範囲が広い発展的内容のテストの２種類の小テストを準備した。

**５ 実践における教員の気づき（生徒の声や反応）**

今回の取組を通じて、生徒が小テストに向けて、前向きに意味ある学習ができているのではないかと感じる。理科を苦手にしている生徒や意欲が感じられなかった生徒が、問題を頑張って解いている姿が見えたり、何とか答えようとする様子が回答から見えた。中には、提出物を成績の頼りにしていた生徒からの不満もあったが、やれば点数がとれ、力になることを実感し前向きに取り組めるようになっている。今後もこの小テスト形式を継続して取り組もうと思っている。

## Ⅱ．１．（１）班長会を核とした学級経営

**１ 実践の場面**

学級活動（１年生班長会における実践）　班長会（６名）

**２ 実践のねらい**

生徒が広い視野や思いやりを持ち、自発的に行動できるようにする。

**３ 実践の内容**

班長会を主体として学級をより良くする取組や生徒考案による席替えを行った。学級にてアンケートを実施し、問題点を具現化し学級運営における改善策を生徒主体で考えた。

また、投票による人選で席替え委員を新たに決めたこともあり、班長会に限らず、生徒が主体となる組織を新たに学級内に作った。

**４ 実践の留意点･工夫点**

**① 生徒の活動**

班長会の招集は、学級の状態や様子に応じて教員から呼びかけるが、班長会での話合いの主体は生徒とし、学級の課題の改善策や様々なアイデアを出す場としている。

**② 教員の関わり**

教員のアドバイスは最小限にしながら、生徒の発案を大切に扱う意識を教員側が持つようにした。

**③ 実践の過程**

話合いの基本は、自分たちの現状を振り返ることから開始し、班替えや改善策の発案に繋げるようにした。

**④ 活動の振り返りや評価**

班長会での話合いや取組を学級全体に広げることで、班長に立候補する生徒が増える等、学級の中で班長会の活動や取組に対する印象や魅力が向上している。

**⑤ 実践の準備**

班長会の話し合いの場には、ホワイトボード等を活用し、可視化できるような工夫を行った。

**５ 実践における教員の気づき（生徒の声や反応）**

話し合いの場を班長会から学級全体に広げることにより、責任を１点集中型（○○さんは△△をする）から選択の幅（○○さんは△△～□□のどれかをする）を設けるような給食の改善システムが生まれ、当番活動を疎かにする生徒が減ったことや、班長による授業遅刻点検によりチャイム着席が徹底されつつある様子がうかがえる。いずれの取組も、特に学級における主体的に行動する姿があまり見られない生徒に効果が顕著に見られ、周りに流されず学校生活を送る生徒の姿が増したように感じる。取組を行った後も、提出物の収集方法等の係活動を、効率的に進める改善策や工夫が生徒自身から自然に発案されるようになった。また、班長を経験した生徒には自覚ある行動が見られるようになり、他の生徒も自ら班長をしたいという意欲が増えたように感じる。

今後の実践として、席替えを班長会で決めるだけでなく、他の方法を生徒自身から提案できる機会を意識的に作るようにしたいと考えている。

## Ⅱ．２．（１）学級代表委員会による学級課題の解決

**１ 実践の場面**

委員会活動（自治的活動における実践）　１年生学級代表委員会（８名）

**２ 実践のねらい**

生徒自身が課題や改善点を考える経験を積むことで、学年全体を生徒主導で動かせるようにする。

**３ 実践の内容**

学級の課題について学級代表委員を中心とした生徒自身で考えた後、一週間単位の生活目標を立て、その振り返りと改善策、達成状況に応じた次なる目標設定を生徒自身で行った。生徒自身の考えや声だけで目標設定とその振り返り、達成度合いの確認を行う。

**４ 実践の留意点･工夫点**

**① 生徒の活動**

教員が生徒のアイデアや考えを前面に出すという姿勢でいることが大切で、生徒に主体を任せることを意識していた。

**② 教員の関わり**

教員は、目標設定に対するアドバイスや手法（課題の見つけ方や目標設定の過程等）について提案し、生徒が後の活動の中身や実際の取組自体に関して考えた。

**③ 実践の過程**

教員が生徒に「自分たちで考え、進める」と言うことを伝えることから始め、その場でアイデアを出すのではなく、「〇〇についての改善策のアイデア」を次回の委員会で出し合えるように、生徒に考える時間を与えるようにした。

**④ 活動の振り返りや評価**

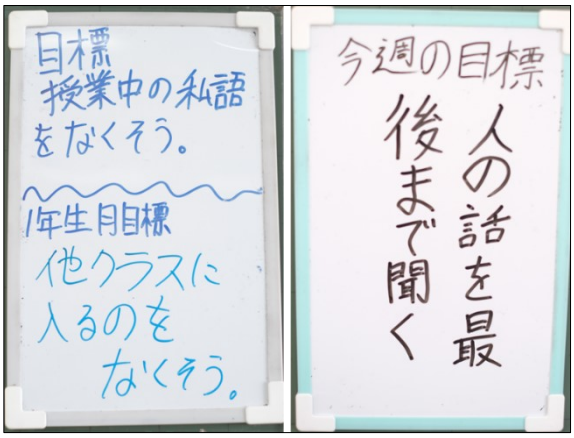
委員会内で取組について生徒自身が振り返りを行う時間を設けた。生徒の中では、改善までは至っていないが、歯止めがかかった実感があったため、その部分については教員からも評価するようにした。

**⑤ 実践の準備**

ミニホワイトボードを準備し、目標を共有できるように工夫した。

**５ 実践における教員の気づき（生徒の声や反応）**

学級の課題を把握することやその改善に向けた具体的な目標を生徒主体で決めることにより、学級代表が学級全体を見渡せる（視野を広く持つ）ようになったと感じる。生徒にテーマを決めさせ、生徒同士の討論会を持ちたい。全員が参加するような学級会議（学級をよくするため）を行う。生徒発信の課題解決をしたい。



## Ⅱ．２．（２）学級代表委員会による目標設定および目標達成の実践

**１ 実践の場面**

委員会活動（自治的活動における実践）　２年生学級代表委員会（８名）

**２ 実践のねらい**

生徒の自立を促し、生徒自身が自分で考え解決する力や、周りに発信する力を身につける。

**３ 実践の内容**

各学級において３段階となる小さな目標を学級代表委員会で設定し、理想のクラス像に近づける自治的活動を行った。

まずは目標設定から始め、その際には、目標の例を教員が提示し、それを参考に目標を生徒が各学級の実態に応じて自由に設定した。学級代表委員が中心となり、設定した目標を学級全体で挙手により達成度合いを確認する。学級で達成できたと判断した後は、次の段階の目標を設定し、再び達成度合いを確認していく。

**４ 実践の留意点・工夫点**

**① 生徒の活動**

どのような目標を設定しても良いという教員の姿勢によって生徒主導の活動になる。

**② 教員の関わり**

基本的には、教員は何も言わないスタンスで目標を立てる際に若干アドバイスをした程度で、生徒に活動の主体を委ねるようにした。

**③ 実践の過程**

今回の取組に限らず、１年時から、廊下を走らない取組やチャイム着席の取組、授業中私語チェック等を生徒が自発的に計画、実施しており、そういった生徒の活動を教員が受け入れることを継続してきた。

**④ 活動の振り返りや評価**

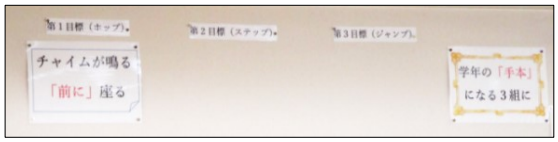
学期末には委員会内で成果を振り返り、次年度の２年生（後輩）へ引き継ぎ事項としてまとめた。

**⑤ 実践の準備**

目標設定のための、目標の例示一覧**【資料Ⅱ．２．（２）】**を準備した。

**５ 実践における教員の気づき（生徒の声や反応）**

生徒主体の活動とすることで、教員が干渉しなくとも、生徒たちだけで考えて動いた取組になった。教員が主導となっていないため、毎週末で良い達成度合いの確認も生徒の判断によって毎日行っている学級も見られた。また、「次の学期には〇〇なことをしてみたい」や「他の委員会と連携した取組が行いたい」と発言する等、生徒が自分たちの考えを積極的に出すようになり、次の取組や活動に向けて意欲的になることが出来る経験となった。



学級代表委員の生徒たちは、自分たちの手で学年をより良くしたい（自治活動を行いたい）と思っているようで、取組における罰則等も生徒自身で考えている。２年時の学級代表委員会に限った雰囲気ではなく、１年時から「学年を自分たちの手で良くする」という学級代表委員会の雰囲気が生徒自身によって創られてきた。

資料資料Ⅱ．２．（２）　目標の例示一覧

# 2年生『みんなで目標達成プロジェクト』

# ２年(　　)組

理想のクラスを作るためにどんなことができるようになってほしいか。

（例）・チャイム１分前着席
・チャイムまでに授業準備完了
・授業はじめと終わりのあいさつがきちんとできる
・授業中の私語や勝手な行動なし
・授業中に挙手で、発表ができる。
・授業中の発表で、きちんと敬語が使える
・クラス全員が、自分の係・当番活動をすることができる
・給食の準備が２年生で１番早い
・２年生で１番教室がきれい
・全員のロッカーが整理整頓されている
・廊下を走らない
・全員、３点セット（名札、マスク、ハンカチ）がそろっている

小さな目標を１つずつクリアしましょう。『他人ごと→自分ごと→みんなごと』

**クラスでアンケートを取って、達成度を確認**

**第１目標（ホップ）**

「　　」

**第２目標（ステップ）**

「　　」

**第３目標（ジャンプ）**

「　　」

# 理想像

「

」クラス

## Ⅱ．２．（３）学級代表委員会による学級の理想像の実現

**１ 実践の場面**

委員会活動（自治的活動における実践）　３年生学級代表委員会（８名）

**２ 実践のねらい**

生徒にとって理想的な学級に向けて、現状に応じた具体的な行動が生徒主体で出来るようにする。

**３ 実践の内容**

学級代表委員会において生徒自身が学級の理想像を考え、その理想像の実現のために３段階の目標設定を行った。

目標設定の最初の段階では、目標を考えるヒントとして教員から例を提示し、より具体的な目標設定を目指した。目標設定を学級毎に行い、毎週末にアンケート用紙でその週の反省を実施し、その結果を数値で表し達成度合いを確認した。アンケートの内容としては、学級代表委員会で設定された目標について、自分自身の振り返りと学級の振り返りの両者を行った。学級の反省と生徒個人の反省では、大きな差が見られず、学級をより良くするためには生徒一人一人が自分自身の行動を改善していくことが必要であることが確認できた。

**４ 実践の留意点･工夫点**

**① 生徒の活動**

実際にアンケート結果を数値化することで、実態を把握しやすくするとともに、今後の改善策を生徒自身で考えやすくなるようにした。

**② 教員の関わり**

目標設定の段階で、最初から全て生徒任せだと抽象的な目標になってしまうことが危惧されたため、教員から例を見せることで具体的な目標設定をねらった。

**③ 実践の過程**

今回の実践では、学級で課題を考える時間を設けることが出来ず、教員から目標設定の例示を行った後に、学級代表委員会の生徒が具体的な目標設定を行った。

**④ 活動の振り返りや評価**

委員会内で振り返りの時間を設けた。生徒にとっては、やって良かったという印象であった。

**⑤ 実践の準備**

目標の例示、目標の教室掲示、各学級でのアンケート**【資料Ⅱ．２．（３）－１】**、集計結果の一覧**【資料Ⅱ．２．（３）－２】**を準備した。

**５ 実践における教員の気づき（生徒の声や反応）**

今回の取組を通しての実感として、「３年生だから出来る」訳ではなく、生徒主体で物事を進めて行くには、１年生からの積み重ねが大切だと感じた。また、クラス全体で問題点や目標について生徒同士の話し合いを行った上で目標設定や改善を進めていきたかったが、時間が確保できなかった。生徒主体とするには時間が必要であることも実感した。

学級代表委員の生徒は、前向きに取り組んでいた。しかし、学級代表委員会の取組にとどまってしまい、各学級で改善策を考える等、学級全体を巻き込んだ取組とすることが出来なかった。

今後の実践では、日々の生徒の活動や委員会での取組、行事の運営や企画を意義や注意点等を踏まえさせながら生徒主体で進めていきたい。

**資料Ⅱ．２．（３）−１　各学級でのアンケート**

## 第３回『みんなで目標達成プロジェクト』

### アンケート用紙

（　　）組　　名前（　　）

※次の項目について、１週目は①のみ、２週目は②のみ、３周目は③と★を答えてください。

［◎しっかり達成できた。○まあまあ達成できた。
△あまりできなかった。×全く意識していなかった
→記号で答えてください。

①第１週目の目標について
　○自分自身の達成度は？　（　　）
　○クラスの達成度は？　（　　）

②第２週目の目標について
　○自分自身の達成度は？　（　　）
　○クラスの達成度は？　（　　）

③第３週目の目標について
　○自分自身の達成度は？　（　　）
　○クラスの達成度は？　（　　）

★クラスの理想像について
　○自分自身の達成度は？　（　　）
　○クラスの達成度は？　（　　）

→週明けの朝に記入し、学級代表委員へ提出
学級代表が保管し、週明け毎に配布・回収

**資料Ⅱ．２．（３）−２　集計結果の一覧**

**第1回**

1組『落ち着いて行動できるクラス』

| 27 | 第1週 | チャイム１分前着席 | | | 第2週 | 授業中私語や勝手な行動無し | | | 第3週 | 授業中私語、居眠り完全無し | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 人 | ◎ | ○ | △ | × | ◎ | ○ | △ | × | ◎ | ○ | △ | × |
| 自分 | 13 | 12 | 2 | 0 | 10 | 16 | 1 | 0 | 9 | 17 | 1 | 0 |
| クラス | 14 | 12 | 1 | 0 | 10 | 16 | 1 | 0 | 9 | 18 | 0 | 0 |

**第2回**

1組『身だしなみを整えるクラス』

| 28 | 第1週 | 名札を忘れずつける | | | 第2週 | ロッカーを常にきれいにする | | | 第3週 | 机の中をきれいにする | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 人 | ◎ | ○ | △ | × | ◎ | ○ | △ | × | ◎ | ○ | △ | × |
| 自分 | 14 | 14 | 0 | 0 | 16 | 12 | 0 | 0 | 18 | 10 | 0 | 0 |
| クラス | 14 | 13 | 1 | 0 | 13 | 14 | 1 | 0 | 17 | 10 | 1 | 0 |

## Ⅱ．２．（４）生徒会による啓発動画作成

**１ 実践の場面**

生徒会活動（啓発動画作成における実践）　生徒会役員（５名）

**２ 実践のねらい**

生徒自身で作り上げたものを評価してもらうことで、生徒の自己肯定感の向上をねらった。

**３ 実践の内容**

生徒会メンバーが中心となり、スマートフォンの使い方に関する啓発動画を「生徒の自己決定」により内容を決め作成し、全校やスマホサミットにて披露した。

作成に当たっては、生徒のアイデアによる動画作成を基本とした。動画によって「何を伝えるのか」、「何が大切か」を生徒に考えさせることから始め、内容や配役も生徒自身で考え、台本を作成した。また、市内のスマホサミットに参加し、作成した動画の放映も行った。

**４ 実践の留意点・工夫点**

**① 生徒の活動**

生徒に「自分たちの手で作り上げている」という経験を得るために、生徒会担当の教員の発案や発信はできる限り少なくし、生徒が主体的に作業を進めた。

**② 教員の関わり**

教員がアドバイスをしながら上手に生徒の思い、意見を拾い上げることを意識した。

**③ 実践の過程**

自分たちで決めて進める良さとして、「自分たちで決める→周りに伝える→交流の場を増やす→自己実現」という過程を大切にしながら、生徒会での活動を進めた。

**④ 活動の振り返りや評価**

スマホサミットの場を利用し、他校生徒からの感想等により評価を得る機会を設けた。

**⑤ 実践の準備**

学校全体における問題点や改善すべき部分を事前にアンケートにて抽出した。

**５ 実践における教員の気づき（生徒の声や反応）**

コロナ禍においていろんな行事が中止・縮小される中でも、全校（全体）で何かできないか等の思いや考えを積極的に出す姿が見られるようになった。スマホサミットに参加した際にも、他校の生徒に興味をもって自分たちが作成した動画を見てもらう経験は、自己肯定感に繋がっていると思う。今後の実践に向けても、生徒自身から出てくる「学校を良くしたい」という思いから、生徒会における生徒発案の取組ができたらと考えている。

## Ⅱ．３．（１） ３年生運動会実行委員会による学年種目の企画･運営

**１ 実践の場面**

行事（運動会における学年種目実施の実践） ３年生（１４２名）、３年生運動会実行委員会（８名）

**２ 実践のねらい**

生徒の集団的主体性の向上をねらった。

**３ 実践の内容**

運動会において、生徒主体で行事を進めることを目的とし、学年種目の詳細を生徒自身が考え、運動会に関する連絡や学年での練習の進行、競技を実施する場面を設けた。

教員から学年種目の実施にあたっての実施条件を提示した上で、実行委員会から学年全体にアンケートを実施、集約、検討し競技の方向性を決めることから始めた。アンケートの回答から実行委員会にて競技内容の方向性（４種目をトラックにてリレー方式で行う競技）を定め、再び競技内容の詳細についてのアンケートを学年全体で実施し、競技内容（ラグビーボール、麻袋、竹馬、バック走）や競技を実施する詳細（順番、距離、ルール、違反基準）を決定した。学年練習の場面で生徒から競技の説明、実演をした後、通し練習をしてみての改善意見を集約し、実行委員会にて改善案を検討、その内容を学年全体に周知をした。その過程を重ね、予行、本番での実施まで至った。

**４ 実践の留意点･工夫点**

**① 生徒の活動**

競技詳細等の決定までの過程も「生徒の自己決定」で行い、生徒には、アイデアを出す前に、その取組や活動の意義について考えるよう意識付けをした。

**② 教員の関わり**

教員から、実施条件（怪我しない競技、支援を要する生徒への配慮、競技の時間、競技を実施する場所等）を提示した。

**③ 実践の過程**

教員側の意思統一（生徒の取組に対しての受容的姿勢）を事前に行うことから始めた。

**④ 活動の振り返りや評価**

取組が失敗しても、意義が達成されればOKのスタンスを教員が持っておくことが大切である。また、実行委員会内だけでなく、学年全員で考えて本番を迎えることに重きを置いた。

**⑤ 実践の準備**

アンケート等の提案は生徒自身が行い、その印刷の準備程度であった。

**５ 実践における教員の気づき（生徒の声や反応）**

実行委員の生徒にとっては、自分たちの声が形になることで、自信に繋がったと思われる。実行委員会での経験によって、学級内での掲示物の指示や係分担等の学級運営に主体的、課題解決的な姿勢が見られた。また、自分たちの手で作り上げることを通じて、教員に良い意味の期待（自分たちの意見を聞いてくれる）を持つようになった。

課題としては、実行委員会の生徒のみでなく学年全体のものとなったかという点が挙げられる。今回の取組のような「生徒主体」である「ボトムアップ」を、普段の学校生活へも発展させていきたい。今後の「生徒の自己決定」に関する実践に向けて、「この先生は～」や「この行事は～」等の限定的なものではなく、全体を巻き込めるような取組を行いたい。

## Ⅱ．３．（２）教員企画による生徒参加型行事

**１ 実践の場面**

行事（生徒参加型行事の実践）　　全校生徒（４２０名）、参加生徒（２０名）

**２ 実践のねらい**

コロナの影響により予定されていた行事の多くが中止となった中で、代替行事を設け、生徒が輝ける場面の設定をねらった。

**３ 実践の内容**

１学期と２学期の２回、自由参加型の学校行事を行った。この実践は、教員のOJTグループ活動における１グループの実践である。

第１回（１学期）は、教員が提案した３種目（百マス計算選手権、ボトルフリップ選手権、大声選手権）を実施した。全校生徒を対象に参加を募り、参加種目も選択できるようにした。７月末に第１回の行事を計画、実施し、中庭にて昼休み（約２０分）の時間を利用した。希望する生徒はもちろん、参加しない生徒も各教室や廊下、中庭内にて自由に観覧することが出来るようにした。第１回の実施の際は教員が司会進行を行った。

第２回目（２学期）は、実施種目も生徒から募り、実施する２種目（バドミントンラリー、丸太切り）を決定した後、第１回と同様に参加者と参加種目を選択できるようにした。今開催では、行事を盛り上げるねらいで、校内にポスター掲示やCM動画を玄関前のモニターにて上映する等の告知を行い、９月末に第１回開催と同様に昼休みの時間に中庭にて開催した。また、行事の司会進行を有志生徒に任せ、より生徒主体となるような行事とすることが出来た。

**４ 実践の留意点・工夫点**

**① 生徒の活動**

参加の有無から選択できるようにし、主体的に参加できる行事とすることをねらいとした。また、実施種目を生徒発案とすることで、生徒の特技を生かした参加とすることが出来た。

**② 教員の関わり**

何もない状態では生徒にイメージが湧かないため、開催にあたってある程度の形式やフォーマットが必要になる。教員による告知や進行の大まかな台本の準備等、大人の手もある程度は必要である。

**③ 実践の過程**

第１回は教員主導で行ったが、その後に第２回を開催する際には、第１回を参考、お手本とすることで、生徒の中の開催に対するイメージを持たせることや、司会進行を生徒に任せることが可能となった。

**④ 活動の振り返りや評価**

参加生徒へのインタビューを行い、振り返りをした。また、参加生徒の様子を所属学級で話題にすることで、周囲からの賞賛を得るようにした。

**⑤ 実践の準備**

行事開催の告知（ポスターやＣＭ作成）、実施競技等に関する生徒アンケート**【資料Ⅱ．３．（２）】**を行った。

**５ 実践における教員の気づき（生徒の声や反応）**

生徒の得意分野からの発案により、普段目立たないような生徒が活躍できる場となった。企画開催のあらゆる場面で生徒に託した行事にすることで、生徒にとってはよりよい経験となり、今後の生活に生かせるものになると考える。そういった経験が生徒の自己肯定感に繋がってほしい。また、今後の課題として、行事に参加した生徒に限定された経験となって、多くの生徒が活躍の場面を経験できる工夫が必要である。

**資料Ⅱ．３．（２）　生徒アンケート**

# 第２回ウエスティカップ　競技アンケート
## ～挑戦者よ、かかってこい！～

年　　組　　番　名前

前回の第１回ウエスティカップに出場してくれた生徒のみなさん、また、盛り上げてくれたオーディエンスのみなさんありがとうございました。

現在、１０月にもウエスティカップを開催しようと考えているところです。

そこで、みなさんにこれこそはチャンピオンになれる！と自信のあることを募集し、その中から競技を開催しようと考えています。以下の条件を踏まえやってみたい競技、これならチャンピオンになれるという競技を書いて提出してください。また、ウエスティカップの運営をしてみたいという人は、はいに〇をしてください。

提出先：１年[redacted]先生、２年[redacted]先生、３年[redacted]先生

★条件★

・中庭で行えるもの。

・周りに危険が及ばないもの。

・道具などを簡単に準備できるもの。

・コロナ感染防止に十分配慮したもの。

競技名

ルール

運営をしてみたい？

はい　　・　　いいえ

## Ⅲ．１．（１）生徒のボトムアップによる部活動運営を目指した取組

**１ 実践の場面**

部活動（女子ソフトテニス部における実践）　女子ソフトテニス部（２０名）

**２ 実践のねらい**

生徒が自分が何をしなければならないのか自覚する（メタ認知能力の育成）ことをねらった。

**３ 実践の内容**

テニス部において、テニスノート（部活動、テニスに関する内容を自由に記述）を生徒の自由な取組としており、生徒自ら振り返りをし、反省を今後に繋げることをねらいとしている。生徒自らがテニスノートを書く・書かない、書いても顧問に提出する・提出しないは生徒自身の意思により決める。

また、対外試合における目標設定を生徒自身で行い、達成状況や振り返りを生徒主体で行っている。その日に設定した目標をホワイトボードに記入、掲示することで具現化し目標を意識しながら活動に取り組むことをねらいとしている。目標についての振り返りも生徒主体とし、達成できたかどうかは生徒の判断によるものである。

**４ 実践の留意点・工夫点**

**① 生徒の活動**

生徒が提案した練習内容を取り入れる等、教員が生徒からのアイデアや考えを聞く姿勢でいるようにした。

**② 教員の関わり**

生徒が目標設定をする際に、目標を達成できていないにも関わらず、自分を客観視出来ずに次の目標を設定するような場合、それとなく教員がアドバイスを行うことで、生徒自身に気づく機会を与える。

**③ 実践の過程**

目標設定は以前より行っていたが、今回の取組では目標設定を共有・可視化出来るようにすることから始めた。

**④ 活動の振り返りや評価に**

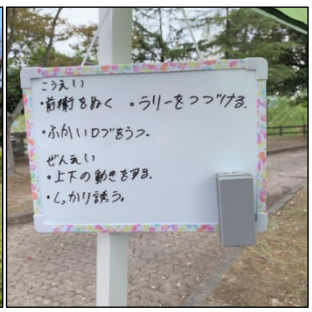
生徒同士で振り返りを行うと同時に、教員からも生徒の活動と、振り返りに対して助言を行うようにした。

**⑤ 実践の準備について**

目標が記入できるようにホワイトボードを準備した。

**５ 実践における教員の気づき（生徒の声や反応）**

３年生ともなると、自分たちで判断し、行動できていたが、１年生や２年生の段階では、まだまだ自分たちで適切な判断や行動が出来ていないこともある。自分たちの学年に代替わりすることで、生徒自身に自覚が現れ、新チーム発足当初から段階的に生徒同士でお互いに声を掛け合いながら活動出来るようになっている。今後は、部長や上級生を中心に、他の生徒たちへの声かけ等の発信力を身に付けさせたい。また、部活動のみに限定した取組とすることなく、普段の学校生活とのバランス（部活動に偏りすぎないように）を生徒が自分で考えられるようにしたい。



指導教員　　柳澤 良明

副指導教員　　津山 勝義

引用文献：坂本昇一(1991)『生徒指導のあり方』開隆堂出版
文部科学省(2010)『生徒指導提要』

中学校における「生徒の自己決定」実践事例集

令和３年３月１７日　発行

執筆者：岡山県津山市津山西中学校　教諭　　福元 亮彦
（香川大学教職大学院　学校力開発コース）